

パンデミックを生き延びる

—— マニラ首都圏都市底辺層女性の

ロックダウン下の日常生活経験から

小ヶ谷千穂

(フェリス女学院大学)

ロレイン・モラレス

(マリキナ市在住)

I. はじめに

COVID-19は社会経済的不平等をあらわにし、さらなる分断を生んできていることがすでに指摘されている。日本を含むいわゆる「グローバル・ノース」におけるエッセンシャル・ワークのジェンダー化・人種化された性質や、非正規女性労働者の雇用への打撃、DVの増加などが指摘される中、「グローバル・サウス」におけるCOVID-19の社会経済的影響、とりわけジェンダー視点からの報告・考察はいまだ多くはない。本事例報告は、ある既婚女性の生活記録を通して、いわゆる「グローバル・サウス」の一角を占めるフィリピン・マニラ首都圏の都市底辺層コミュニティにおける、ロックダウン下での日常生活を報告する。

II. 2020年3月の調査時の状況

マニラ首都圏においては、2020年3月15日からロックダウン(Enhanced

Community Quarantine = 強化されたコミュニティ隔離措置)が実施され、厳しい移動制限が2カ月間続いた。その後、MECQ(Modified ECQ = 修正を加えたECQ)に移行し、6月1日にはGCQ(General Community Quarantine = 一般的なCQ)までレベルが引き下げられた¹。

本報告の舞台となるMエリアのあるマリキナ市は、マニラ首都圏の北東部に位置している。マリキナ市は、マニラ首都圏に1996年に編入された市で、農業から工業(特に靴産業)に転換が進められた街であり、近年は「成功した都市政策」の実験の場でもある。(関2017)Mエリアのあるマランダイ地区は、マリキナ市の16バラングイのうち最大人口を持っており、2015年現在で人口は55,442人(2015 Census of Population and Housing, NSO)、総世帯数は11,167(2007年現在)で、そのうち約6,000

1 ECQ、MECQ、GCQの詳細についてはジェトロマニラ事務所を参照。<https://www.jetro.go.jp/newsletter/orf/2020/news/ECQ.pdf> (2020年5月18日取得)。

世帯が土地の所有権がないインフォーマル居住者とされている（関2017）。Mエリアにおいても、土地の所有権がある世帯、ない世帯、そしてそれらの中での借家住まいなどが混在しており、ここではMエリアを広義のスクワッター地区として位置づけておきたい。またマランダイ地区は、マリキナ川という主要河川に近接しており、台風オンドイ（2009年）をはじめとする大型台風や大雨のたびに床上浸水する代表的な被災地の一つであり、最近でも、頻繁に水害に見舞われている。

Mエリアの就業構造は、典型的なマニラの都市底辺（urban bottom）の特徴を有している。中程度の学歴（フィリピンのハイスクール卒あるいは中退）の男性はフィリピンの庶民の足であるジープニー（乗り合いジープ）やトライシクル（バイクタクシー）の運転手として、そしてその配偶者である既婚女性たちはフィリピンでの雇用における年齢差別や学歴不足などを理由に、日常的には再生産労働に従事し、ジープニーやトライシクル運転手の夫の出来高ベースの収入で子どもたちとの生活を維持してきた。他方で、Mエリアで育ち、大卒の学歴を身につけた若年女性の中には、コールセンターなどBPO（Business Process Outsourcing = ビジネス業務のアウトソーシング）産業で働く者も出てきている²。

今回の報告の中心となる、最も移動制限が厳しかったECQの時期には、庶民の足であるジープニーやトライシクルが営業禁止となったため、Mエリアではきわめて多く

の男性が職を失った。COVID-19の感染が拡大する中で医療へのアクセスも容易でない都市底辺層の女性たちは、経済的不安、子どもたちの将来への不安、そして何よりも感染への不安に怯えながら3カ月を過ごした。そうした不安が重なる中で政治家や富裕層への不満が醸成され、同時にコミュニティ内での女性たち同士での連帯がより強く意識されていく様子を報告したい。

なお、本報告は、執筆者の一人でMエリアの住人であるロレイン・モラレスの2020年3月12日～2020年5月29日までの生活記録をもとにしている。モラレスは筆者（小ヶ谷）の長年にわたるリサーチ・アシスタントであり、今回ECQに入る直前から終了までの期間、ほぼ毎日日記の形で日々の生活や心情の変化、Mエリアの近隣住民や親せきたちの様子などをつづつてもらった。原文はタガログ語で、A4で35ページの分量である。全文の発表・分析は別稿に譲り、本報告では記録から読みとれるいくつかのポイントに絞って報告する。

モラレスは現在39歳で、夫と5人の子ども（18歳から11歳）、夫の両親（父は元海外出稼ぎ労働者、母は洋裁店を経営）、姪（コールセンター勤務）と暮らしている。同い年の夫は大卒で、電気工事関係の会社にエンジニアとして勤めている。モラレスも夫もMエリアで生まれ育っており、モラレスの母親も、同じMエリアにモラレスの妹一家と一緒に暮らしている（父親は2019年に死去）。

2 Mエリアの女性の世代別就業経験については、小ヶ谷（2021）を参照されたい。

Ⅲ. ロックダウン下での雇用

3月13日に、2日後のECQが大統領から発表された時に、真っ先にモラレスの不安材料となったのは、移動制限がかかった場合に夫が出勤できるのか、そして仕事を続けられるのか、ということであった。

ニーニョ (=夫) がもし出勤停止になって、“No Work No Pay” (働かなければ支払われない) になってしまったら、私たちはどうやって食べていけばいいのだろう……。明日は本来なら給料日だ。給料が出たらアルコールとマスクを買おう。でも、もし買うお金がなかったら……。水道光熱費を払ったら、どうやって夫の収入だけでやっていけるのだろうか。キエル (長男) の学費も卒業式の費用³もまだ支払っていないし、給料がきちんと支払われなければ、食べものをどうしたらいいのか……。

(2020年3月13日)

Mエリアの中でも比較的安定した収入を得ているモラレスの世帯にあっても、月に2回支払われる夫の給料でぎりぎりの生活をしていたことがわかる。しかし、夫の収入が途切れることへの恐怖と同時に、夫の出勤がかなっても、それによって感染リスクが高まり、そのことでコミュニティにCOVID-19が広まってしまうことへの恐怖もあった。結局、夫の会社からは3000ペソ (日本円で約6000円) の一時金が支払われ

たが、夫は感染を恐れてECQの期間出勤を2カ月止めた。

ECQの期間、Mエリアの人々の雇用状況は、厳しさを増していった。特にトライシクルの運転や、路上での食品販売をしていた男性、路上清掃員の女性はECQで瞬時に影響を受けた。

ノエル (従妹の夫) やアドール叔父さんは気の毒だ。乗客がないので、トライシクルからの収入がない。近所の人で、タホ⁴を売っている人も、買う人がいないので売れ残っているという。たぶん、タホやフィッシュ・ボールのようなストリート・フードを買って食べることを、子どもたちも怖がっているのだろう。COVIDのせいだ。グレン (妹の夫) も、病院での仕事 (= 院内清掃) と掛け持ちしているバイクの修理も、客が来ないので仕事がないとのこと。たしかに今、食べ物よりもバイクにお金を使う人はいないだろう。

(2020年3月15日)

近所のジェマさんも気の毒だ。夫が亡くなって、道路清掃 (street sweeper) の仕事をしながら子どもと孫を支えてきたが、もう何週間も仕事がない。昨日、バランガイ・キャプテンが米を配ってくれたが、ジェマさんのところでは2日ももたないだろう。

(2020年3月28日)

3 長男はこの3月にハイスクールを卒業した。

4 豆腐ベースのデザート。ストリート・フードの一つである。

人が集まることが禁じられたため、モラレスの夫の母の洋裁店は閉店となった。また、モラレスと同世代の従妹で、近隣のショッピング・モールで勤務していた女性達は、モールの閉鎖に伴い仕事を失った。(中には4カ月の乳幼児を抱えた女性もあり、ミルク代もままならない状況に陥ってしまった。) 他方で、モラレスの夫の妹は、外資系のコールセンターで勤務しており、ECQに入るとすぐに、会社からPCが貸与され、在宅勤務に切り替わった。コミュニティ内においても、さらには同居家族内でも、雇用の持続にはばらつきが見られ、外資とつながりのある職業にあるものが最も安定した収入を維持できたのだ。

IV. 感染への恐怖

感染の恐怖から夫が出勤を止めたように、モラレスにとっては、COVID-19への感染そのものの恐怖が一貫してあった。その理由は、広義のスクウォッター地区における居住環境と、子どもや親類たちの脆弱な健康状態や教育環境にあった。

こんなに壁が板一枚のような家ばかりのところで、social distancing などどうやってできるのか。特に実家の母のところなどはとても無理だ。建物の二階で暮らしている人は、屋根も近くて暑いので、日ごろから外に出て座ることが多い。外に座っていて、ウィルスに感染したらどうするのか。一度感染者が出たら、こういう狭いところに人が集まって住んでいる場所では、すぐに拡がってしまうだろう。

(2020年3月13日)

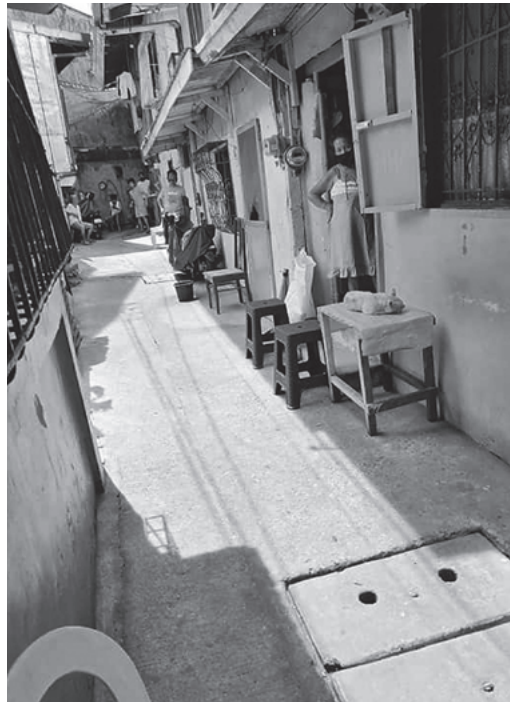


写真1 食糧支援を待つMエリアの人々
(2020年4月24日、モラレス撮影)

2019年に父親を亡くして、また病院勤務をしている妹の夫もいるモラレスたち家族は、貧しい人々が行ける公立病院が常に人であふれ、救急対応もしてもらえないことが多いことを知っていた。なので、COVID-19にかかった場合に、医療に頼ることが不可能であることを体験的にわかってきたため、薬局で買えるビタミン剤や薬で子どもたちの健康を守ろうとした。

妹の夫のグレンは病院の清掃の仕事をしている。入院患者のシーツを洗う仕事なので、ウィルスへのリスクが高い。病院からマスクは配布されているが、13カ月目の給料(=ボーナス)を食料やアルコールのために求めたとこ

ろ、拒否された。姪のモナイの薬を買うために、妹たちは“five-six⁵”で借金をしたという。状況が悪化して、病弱なモナイの薬を買いに行けなくなると困るからだ。食料よりも、薬代のために妹たちは借金をした。

(2020年3月14日)

モラレスは、4月、5月となって近隣の人々や親類たちが少しずつ家の外に出て活動をし始める中でも、stay homeにこだわっていた一人だった。そこには、ひとたび感染した時の想像を絶する不安があった。夫とともに、もしも家族で感染したら、健康状態からいってどの子どもから先に亡くなってしまいかを話し、涙したこともあったという。ゆえに、何度もECQが延長される中、休校されていた学校の再開が話題に上る5月になると、子どもたちの感染に対する、モラレスの恐怖は再燃する。

教育省は、8月24日に学校を再開するという⁶。どうやってこの状況で子どもたちを通わせるというんだろう！1クラスに50人で勉強させるのは怖すぎる。オンライン授業にするというけれど、すべての子どもがラップトップ（ノートパソコン）や携帯電話、Wi-Fiを持っているわけではないのに。持っていない子はどうするの？だから私は、学校の再開には賛成しない。うちの子どもたちは1年遅らせてもかまわな

い。私の精神状態にもいい。今は子どもたちが咳をひとつするだけで、感染したか？と不安になってしまう。

(2020年5月24日)

V. 消費生活と社会生活の制限

ECQの予告直後から、panic buyingと呼ばれる買占めがマリキナ市でも始まった。

お金のある人は、スーパーマーケットに並んで、生活必需品を買っている。食料、アルコール、マスク、薬、ビタミン剤……。マーケットにもクリスマス並みにたくさんの人がいる。そのこと自体が怖い。お金のない私たちは、感染を恐れて家でじっと祈っているしかない……。

(2020年3月13日)

その後もECQ予告から3日で薬局からマスクがなくなるなど、panic buyingの影響は続いた。また、1家族1人だけが買い物に出ていい、というルールによって乗客が少なくなったトライシクルの乗車料金も、1回10ペソから1回30ペソへと3倍に値上がりした。人数制限されたスーパーでは買い物のために長蛇の列ができた。それでも感染を避けるためには耐えるしかない、と人々は並んだ。電気料金は1カ月（のちに2カ月）支払いが免除されたが、将来の支払いのことを考えると、不安が減ることはな

5 「5借りて6返済する」という仕組みの高利貸しのこと。

6 その後、学校再開は10月となり、すべてオンライン授業となった。

かったという。

ECQ下では、コミュニティでのささやかな祝い事もできなくなってしまった。

今日はニーニョと私の記念日だ。18年の結婚生活とその前の5年間の恋人関係。神様に感謝。毎年ミリエンダ(=おやつ)を作って、近所の人に配っていた。そうやってみんなで楽しいことも悲しいことも分かち合ってきたけれど、今年はそれができない。今年は作らないの?と聞かれるけれど、ごめんね、また来年ね、と答える。Social distancingが求められているから。

(2020年3月23日)

生活が制限され、収入も激減する中で政府からの援助物資は当初なかなか届かなかった。結局、3月15日からの2カ月間で市からも含めて5回、米やわずかな食糧が届けられたが、むしろ早かったのは、concerned citizen と呼ばれる一般市民や民間団体からの援助だった。また、芸能人などから医療従事者への寄付行為も報道され、そうした行動に感謝すると同時に、政府や政治家への不信は募っていった。

VI. 政治への不満と政治意識の高まり

ECQ開始から約10日後に、ある政治家が「フィリピン人は2週間くらい食べなくても死なない」と発言し、大きな問題となった。モラレスの日記にも、政治への不信感が強くにじむようになる。



写真2 感染者が出たために封鎖された通路
(2020年7月4日、モラレス撮影)

(件の発言をした政治家は) ひもじい人間の気持ちがわからないのだろう。子どもがお腹を空かせているのを見る父親のつらさ(=その発言をした政治家は男性だった)がわからないんだ! 政治家は2カ月家にこもっていても食べものに困らないからだろう。政治家の中には、症状がないのに検査キットを自分たちのために使って、必要な人から奪っている者もいるらしい。なんて面の皮の厚い政治家たちなんだ。こういう自分のことを優先した政治家のことはよく覚えておいて、次の選挙で投票しないようにしないとイケない。

(2020年3月24日)

ECQを緩和して、経済活動を再開するという政府の決断が、よいのかどうか

わからない。政府は、フィリピン経済が潰れてしまうのが怖いのだろう。健康でお金があって、感染しても病院で診てもらえれば、もちろん大丈夫でしょうよ。でも貧しくて、薬を買うお金もなかったら、もう死ぬしかない……。

(2020年5月16日)

また、社会福祉開発省を通じた現金給付(Social Amelioration Program)をめぐっても、政府の方針が二転三転し、最も困っている人たちに現金給付が届かない、といった現状が見られた。

VII. 相互扶助と、ポジティブな発想

ECQ下での生活不安とパンデミックの恐怖に怯えながらも、他方でコミュニティ内や親族内での相互扶助は続いていた。たとえばMエリアの中でも比較的人通りの多いところに住まいがあるモラレスの従妹たちは、ゴトという粥を作って道行く人に振る舞うことを続けた。また、夫が失業してしまった、別の地区に住む従妹が援助を求めてモラレスを訪ねてきて、現金や米を援助したこともあった。援助とは言っても、わずかな金額しか援助できないことへの葛藤も、記録からは感じられた。また、モラレスたちに対して、経済的に余裕のあ

る親族が米を援助してくれたこともあった。フィリピンで**bayanihan**と呼ばれる相互扶助の思想はパンデミック下の制限された生活の中でも、少しずつではあるが続けられていた。

また、ECQになったことによって、交通渋滞が減り排気ガスがなくなって環境による影響があったり、出勤を停止した夫が常に家にいることで**quality time**を家族で持つことができるようになった、といったポジティブな発想も、モラレスの記録には時折現れていた。

VIII. まとめにかえて

以上、モラレスの記録の一部から、ロックダウン下でのMエリアの状況やモラレスの心情を報告した。ここには、居住環境、医療体制と健康不安、雇用と収入の不安定さ、といった複数の生活不安が、感染症拡大の中で特に既婚女性にのしかかっていることが見て取れる。また、経済活動の再開と、感染不安との間で揺れ動く複雑な心情も読み取れた。相互扶助の担い手として言及されるのが常に女性であることや、都市底辺層の既婚女性が夫の不安定な収入源に頼らざるを得ない中でさまざまなケア活動をしなければならない現状などについては、今後分析を続けていきたい。

参考文献

- 青木秀男, 2013, 『マニラの都市底辺層～変容する労働と貧困』 大学教育出版。
 小ヶ谷千穂, 2021, 「マニラ首都圏都市底辺層コミュニティから見る新国際分業と『移動の女性化』～女性の世代別就労歴に着目して～」『フェリス女学院大学文学部紀要』第56号: pp. 1-16。
 関恒樹, 2017, 『「社会的なもの」の人類学—フィリピンのグローバル化と開発にみるつながりの諸

パンデミックを生き延びる

相』明石書店.

(掲載決定日：2021年5月14日)